

今宵、フィッツジェラルド劇場で

2007(平成19)年3月21日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・製作＝ロバート・アルトマン／脚本・原案＝ギャリソン・キラー／出演＝メリル・ストリープ／リリー・トムリン／ウディ・ハレルソン／ジョン・C・ライリー／トミー・リー・ジョーンズ／ケヴィン・クライン／リンジー・ローハン／ヴァージニア・マドセン／ギャリソン・キラー／L・Q・ジョーンズ／マヤ・ルドルフ (ムービーアイ配給／2006年アメリカ映画／105分)

……2006年11月に81歳で亡くなった巨匠ロバート・アルトマン監督の遺作が、こんなに楽しく心を温かくする映画音楽になったのは何ともラッキー……。『今宵』『フィッツジェラルド劇場』の舞台上に登場するのは懐かしいミュージシャンたちだが、1人純白のトレンチコートのブロンド美女は一体ダレ、そして何をする人……？ さらに、長寿の人気番組を持つ放送局を丸ごと買収した「首切り屋」の狙いは……？ 登場人物たちが織りなす人間模様は愛すべきものばかり。別れの訪れは仕方ないが、別れを再出発にできるかどうかはあなた次第……。『老人の死は悲劇じゃない』という名セリフをアルトマン監督の死と重ね合わせながら、じっくりと味わいたいものだ。

ロバート・アルトマン監督とは……？

ロバート・アルトマン監督は、カンヌ、ベネチア、ベルリンの三大映画祭で最高賞を受賞した他、アカデミー賞監督賞にも5度ノミネートされた超有名な巨匠。そんな1925年生まれのアルトマン監督は、この映画完成後の2006年11月20日に81歳で亡くなったから、この映画は彼の遺作。

そんな巨匠の遺作だから、この映画のパンフレットには彼の功績や魅力についてたくさんの解説や対談があるが、残念ながら私は彼の作品は『相続人』(97年)しか観ていない。したがって、そこで語られている多くのことは私には実感できないことばかり。その意味で、アルトマン監督作品に関しては、私は評論家失格

と言われても仕方ないかも……。

こんな映画大スキ……

私のミュージカル映画好き、映画音楽好きは、『SHOW - HEY シネマルーム』ファンの皆さんはご存知のとおり……。したがって、アルトマン監督の最後の作品が、こんなにわかりやすく懐かしく、そしてちょっと寂しいけれども心温まる楽しい映画音楽(?)になったのは、私にとってラッキー。3月18日に観た『ステップ・アップ』(06年)のストリートダンスやヒップホップ音楽もたまにはいいものだが、やはりアメリカのフォーク、カントリーそして『スワニー・リバー』や『レッドリバーバレイ』などの国民的叙情歌(?)はいつ聴いてもいいもの……。そんな懐かしい曲の数々を、「今宵」[フィッツジェラルド劇場]でナマで聴けるのだから、こんなうれしいことはない……。

さらに、さすが老練アルトマン監督は、実在のラジオ番組『プレイリー・ホーム・コンパニオン』を借りて数々の名曲を送るについて、純白のトレンチコートを着たナゾのブロンド美女デンジャラス・ウーマン(ヴァージニア・マドセン)を登場させることによって物語にスリル性を持ち込むとともに、今宵限りで番組終了という寂しさとそこから生まれるさまざまな人間模様に面白い味付けを……。私はこんな映画大スキ!

さすが、大阪の観客の目はたしか……?

3月21日は祝日だからかもしれないが、テアトル梅田における昼12時30分からの上映は、定員96名が満席のうえ立ち見ができるほど大好評。30億円をかけた超大作『蒼き狼 地果て海尽きるまで』(06年)の観客動員が伸びていないのに、単館上映の『今宵、フィッツジェラルド劇場で』がこれだけ満席になっているのは、やはり大阪の観客の目は肥えているということか……?

さらに感心したのは、立ち見を含めた今日の100名超の観客は、年配者が多いせいもあってお行儀が良く、エンドロールになってからも8割以上の観客が立ち上がりず、幕が下りるまで座って観ていたこと。これは最近珍しい現象……。

メリル・ストリープの歌に注目！

公開ラジオ番組『プレイリー・ホーム・コンパニオン』で、今宵フィッツジェラルド劇場の舞台に登場するミュージシャンは多彩だが、注目の第1は、ベテラン女性デュオのヨランダ・ジョンソン（メリル・ストリープ）とロンダ・ジョンソン（リリー・トムリン）。日本で言えばさしずめ、叙情歌や童謡を歌い継いでいる安田祥子・由紀さおり姉妹のようなもの……？

このヨランダ・ロンダ姉妹は、自分たちのことを「カーター・ファミリーのようなもの。あれほど有名じゃないだけ」と説明するが、このセリフを理解するためには、ホアキン・フェニックスとリーズ・ウィザースプーンが主演した『ウォーク・ザ・ライン 君につづく道』（05年）を観ていなければダメ。すなわち、『ウォーク・ザ・ライン 君につづく道』で見事に主演女優賞を受賞したリーズ・ウィザースプーン扮するジューン・カーターが、このカーター・ファミリーの1人なのだ。

ちなみに、ヨランダには一人娘のローラ（リンジー・ローハン）がおり、最後にはこのローラも舞台上で歌手デビューするからそれにもご注目！

懐かしく心洗われる歌をタップリと……

今宵が最終回だから、という特別な面があるからかもしれないが、ヨランダ・ロンダ姉妹の他、ダスティ（ウディ・ハレルソン）&レフティ（ジョン・C・ライリー）という2人のカウボーイ男が歌う歌も懐かしいもの。また、ちょっと下品で卑猥な掛け合いソングも面白い。ちなみに、これを聴いていて何の脈絡もないまま私が思い出したのが、大学時代に大ヒットした高石ともやの『受験生ブルース』だが、それは一体なぜ……？

舞台上にはさらに、『ドリームガールズ』（06年）で助演女優賞を受賞したジェニファー・ハドソンを彷彿させるようなゴスペルを歌う黒人女性歌手が登場するし、白髪のベテランシンガー、チャック・エイカーズ（L・Q・ジョーンズ）などが登場し、心温まる美しい歌声を聴かせてくれる。したがって、これらの歌声はきっとあなたの心を癒してくれるはず……。

アメリカでも、ニッポン放送買収と同じ話が……

『プレイリー・ホーム・コンパニオン』の放送が今宵限りで打ち切りとなるのは、今でいう M&A（企業の吸収合併）のため。すなわち、アメリカ中西部のミネソタ州のセントポールにある地元のラジオ局 WLT は、全米のリッスナーに親しまれてきたが、局ごとテキサスの企業家アックスマン（トミー・リー・ジョーンズ）に買収されてしまった。

去る3月16日、懲役2年6カ月の実刑判決を受けたホリエモンこと堀江貴文のライブドアによるニッポン放送買収劇は記憶に新しいところだが、それと全く同じ話がアメリカのミネソタ州でも起こっていたわけだ。映画の後半、最終回の公開放送もボチボチ終わりという段階で、「首切りマン」であるアックスマンが劇場に姿を現してくる。それを迎えるのが、劇場の保安係のガイ・ノワール（ケヴィン・クライン）だが、この2人の大人の丁々発止の会話(?)は面白い。また、ナゾの純白のトレンチコートの美女がここで大きな役割を果たすから、それもお見逃しなく……。

キーマンは司会者のギャリソン!

この映画で、司会者ギャリソン・キラーを演じているのはギャリソン・キラーその人。つまり、彼は実は、ラジオ番組『プレイリー・ホーム・コンパニオン』のクリエイター兼司会者を現実につとめている人物なのだ。したがって、映画初出演だが、しゃべりはもちろん、マネージャーとの連絡や歌のバックの協力などその仕事ぶりは板についたもの……。そのうえ(?)、彼がこの映画の原案を出し、脚本を書いたというから、彼がこの映画のキーマンであることはまちがいない。

司会業の他、作家としてもたくさんの著書を持つというマルチタレントの彼は1942年生まれだが、その彼が今も番組で活躍しているのがこのフィッツジェラルド劇場とのこと。さしずめ、ラジオとテレビの違いこそあれ、その司会における名調子は、「一週間のごぶさたでした」のセリフで有名な、日本の玉置宏……?

別れと再出発の人間模様をじっくりと……

『THE 有頂天ホテル』(05年)は、大晦日のカウントダウンのためにホテルに集まった人々の面白い人間模様を描いた名作だったが、『今宵、フィッツジェラルド劇場で』は、人気公開ラジオ番組の最終回に集う人間たちが織りなす人間模様を描いたもの。したがって、そのテーマは別れと再出発。

ちなみに、アルトマン監督がこの映画を製作するにあたっては、保険会社(完成保証会社あるいはボンド)から「スタンバイ・ディレクター」をつけること、という条件がついていたらしい。つまり、映画製作の途中でアルトマン監督に万一のことがあった場合、スタンバイ・ディレクターであるポール・トーマス・アンダーソン監督が監督の仕事を引き継ぐという条件だったというから、さすがハリウッドの映画製作の現場は厳しいもの。

このように、80歳を超えたアルトマン監督にとっては、いつこの世の別れがきてもおかしくないという覚悟でこの映画の監督に臨んだわけ(?)だから、最終回ということについての思い入れが強いのは当然。そしてその分、その別れを再出発にしなければという思いも強かったはず……。したがって、この映画の中で純白のコートの美女が言う「老人の死は悲劇じゃない」という有名なセリフの説得力は抜群……。そんなアルトマン監督のメッセージを、私たちはしっかり受け止めたいものだ。

2007(平成19)年3月22日記